

ス  
ラ  
イ  
ド  
1



## Great Sea Battles

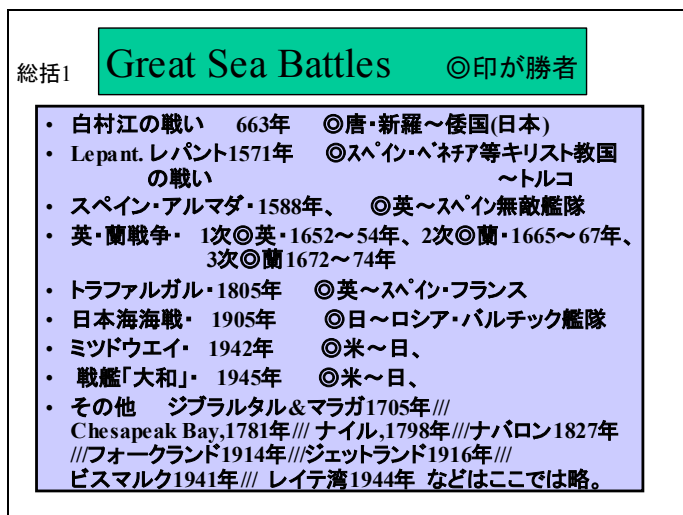
絵巻

岡本 洋

2008(平成 20)年 1 月 9 日  
海友フォーラム  
第二回懇談会にて発表

当日発表の Power Point  
を Word に取り込み追記

ス  
ラ  
イ  
ド  
2



「海の戦い」は常に世界の歴史の転換点となった。その中から、以下をとりあげた。

白村江の戦い

レパントの戦い

アルマダの戦い

英蘭戦争

トラファルガルの戦い

日本海海戦、ミッドウエイ、戦艦「大和」。

総括2	Great Sea Battles と 「海と世界の支配」の転換 ⇒ は、勝者、台頭
	「フェニキア」⇒「カルタゴ」⇒「ローマ」⇒「トルコ」支配の変遷 「レパントの戦い」⇒ヴェネチア、そしてイスラムからキリスト教 国・スペイン・ポルトガル へと「歴史の大きな転換」 「アルマダ」⇒ イギリス……侵攻阻止の勝利 1 「ジブラルタル、マラガ」⇒ イギリス ……同 2 「トラファルガル」⇒ イギリス、(蘭、仏 の後退)……同 3 「チェサピーク」 ⇒ アメリカ 日本海(対馬) ⇒ 日本……完全勝利。日本の大国への躍進 1, 2 次世界大戦 ⇒ 米・英 ……米国の一極支配への道 「ビスマルク」、「ミッドウエイ」、「レイテ湾」、「大和」などの敗戦

地中海世界では、変遷をへて、ヴェネチアが造船・海運国として繁栄。「レパントの戦い」が一つの転換点。次第に7つの海を支配する大英帝国の時代へ。二次の大戦をへて米国の時代に。それぞれの節目に Great Sea Battles。

白村江の戦い 663年
<ul style="list-style-type: none"><li>倭国は唐(中国)に大敗し、朝鮮半島における権益を失う。</li><li>倭国は、東アジアに孤立。国家的危機に晒され、国防(水城、山城)・内政(法制など)に整備を迫られる。</li><li>謎。残存資料があまりにも少ない。<ol style="list-style-type: none"><li>1. 救援……何故大国・唐を相手にして、国家的な大軍をおくる理由があったか。(韓国側の説では、百済は大和朝廷 のルーツ故の救援?)</li><li>2. 船団……わが国の整備。船の実態など。</li><li>3. 大敗……戦闘の実態。</li></ol></li></ul>
2008.2 岡本 洋 4

古代の日本の大海戦と日本軍の大敗  
「白村江(の戦い)」の読み  
日本書紀(のみ)、ハクシエ  
韓国では白馬江<sup>ペクチョンガ</sup>  
ン、  
中国史書:白江。  
日本の学界では ハクソンコ  
がほぼ定着(NHK)。

# 回覧

ス  
ラ  
イ  
ド  
5

**白村江1 白村江の戦い、日本の大敗**

時：663年8月27,28日、第38代天智天皇(但し、称制)  
 場所：韓国中西部、現在の錦江の河口(異説あり)  
 敵方：兵力7.3万人、軍船170隻、  
 倭国(日本)軍：兵力は3隊計1万人(3月に既に2.7万人派遣)、軍船1,000隻、内、400隻が敵の攻撃で炎上され、大敗した。

背景：3年前の660年唐に滅ぼされた百済遺臣団(鬼室福信が中心)の要請にこたえ、百済から631年以来、人質として日本にいた豊璋王子を返し、援軍を送る。日本の方針：齊明天皇の決定。作戦指導は中大兄皇子。共に、飛鳥から博多に出陣。軍船は駿河の国に建造を命じたとされる。

戦後の倭国  
 敗戦以後、対外意識の高揚の中、唐の冊封体制に従わない自己主張としての倭国の「日本」が生まれた(NHK)。

ス  
ラ  
イ  
ド  
6

**白村江1 白村江の戦い 663年8月28日**

倭国の船づくり「駿河の国に命じた」とされる。

倭国水軍 1,000隻 (内400隻炎上して大敗)

唐軍 軍船 170隻

660年 百済滅亡(唐と新羅の連合軍により)。百済復興のための救援依頼を、中大兄皇子は受ける。倭国軍船団は渡海して韓国へ。

- 1.高句麗
  - 2.新羅==唐
  - 3.百済= 倭国
- 3 グループの対立関係  
 百済の攻撃を受けて、新羅は唐に援軍を依頼。  
 唐軍は、黄海をわたり韓国に侵攻。  
 倭国は百済の救援依頼を受けて玄界灘を越えて大軍を派遣。

ス  
ラ  
イ  
ド  
7

**白村江3 韓国内の関係位置**

唐 663

新羅

百済

唐・新羅軍

倭国軍

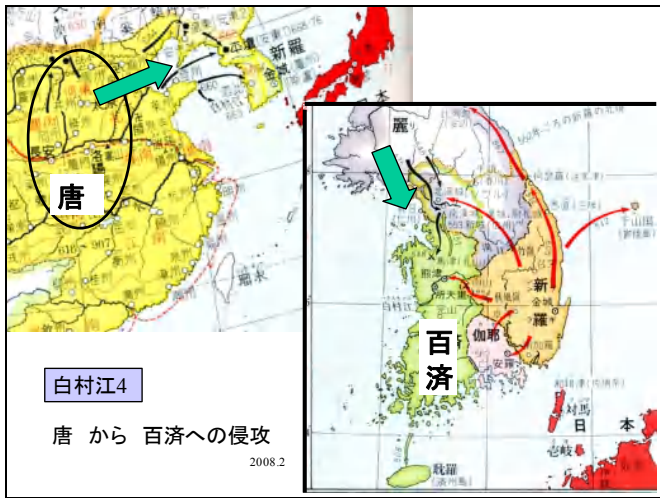
661年、齊明中大兄皇子が

出典：『戦乱の日本史[合戦と人物]』より「百済の役」鈴木英夫

唐・新羅連合軍と倭国救援軍の戦いのクライマックスの海戦場所が、白村江。  
 現在の錦江が黄海に注ぐ河口付近。

# 回覧

ス  
ラ  
イ  
ド  
8



百済と伽耶と倭国

「伽耶」は倭国の権益地域。と同時に百済と新羅の取りつ、取られつの争奪地域。642年大攻勢の下に百済が攻略。倭国は百済に伽耶の御調ミヅギを要求。百済はこれに応じ人質「余豊璋」をさしだす(643年)。

ス  
ラ  
イ  
ド  
9

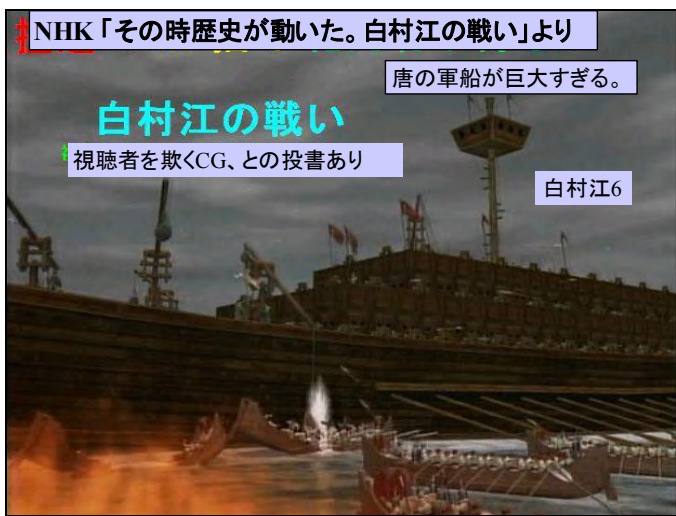


戦闘のCG

(NHK TVより)

倭国軍は、突撃する。  
挟撃されて大敗。

ス  
ラ  
イ  
ド  
10

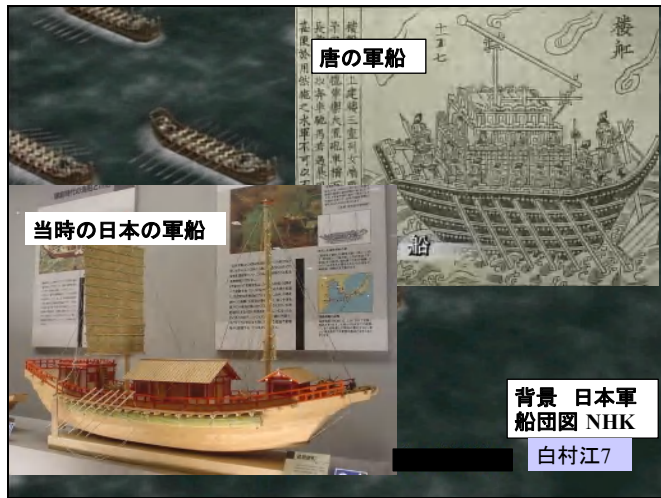


戦闘のCG

(NHK TVより)

背後に見える唐の軍船は、船体、オール、クレーンのような投石器(?)などバランスを欠く大きさに、疑問。





当時の軍船  
中国の文献  
日本の復元模型(展示)

## Great Sea Battles について 2008.02 (補足説明)

### 1. Great Sea Battles

1.1 大海戦とはその勝敗が、お互いの国の命運を支配し、且つ世界の海の覇権、世界歴史の潮流を方向付ける様な主艦隊同士の海戦と言うべきであろう。ただここでは、太平洋戦争の中から航空機攻撃によるものであり、やや異質ともいえるが、特別の意味がある2件をふくめて、スライドに示す8件とした。

然し、世界ではこの8件にとどまらず、過去に多くの大海戦があった。たとえば「Great Sea battles」 by Oliver Warner. The Hamlyn Publishing Group Ltd. England. 1968. では、計26の海戦をあげて論じている。その最初は1571年の「Lepantの戦い」であり、最後は1944年の「Leyte Gulf」(レイテ湾、戦艦「武蔵」の沈没)となっている。白村江や、戦艦「大和」の沖縄特攻は取り上げられていない。然し、私としてはこれを省くことはできないので欧州域内や米国独立戦争関連海戦は適当に省いた。

1.2 ここでは、主に視覚的に海戦をみようとして、「絵巻」とした。一般に海戦の文献には、視覚的な海図、軍艦の資料、戦闘状況を丁寧に示すものは比較的少ないので、自然に絵画的なものが多くなる。ただ太平洋戦争における米国の場合はことなり、戦果の客観的評価のため戦果の記録を積極的におこなっているため、多くの記録が存在する違いがある。然し、どちらにしても、歴史の常としてどこまでが真実かという問題は、依然として拭いきれない。絵巻としてみるしかない場面も多い。そういう前提である。

1.3 ここに取上げたもの以外に、日本においても、元寇、倭寇、壇ノ浦の戦い、秀吉対毛利の大坂湾海戦、秀吉の対朝鮮戦争における海戦(亀船、敗戦)、黄海の海戦など興味ある海戦も多いが、頭初の定義から、これらは別とする。更にまた、太平洋戦争においてはプリンス・オブ・ウェルス(英・戦艦)の撃沈、珊瑚礁沖海戦など重要な海戦に

についても同様である。

## 2. 白村江の戦い 663年

この海戦は、わが国が古代において、国家的な大軍勢を韓国にまで派遣した上で大敗したもので、はじめて超大国とも言うべき唐からの外圧を実感させられた歴史的な海戦である。然し、不明な点も多い。定説に対する異説もある。

2.1 中国、韓国の状況———聖徳太子が小野の妹子を隋に派遣したのは607年で、相手は、あの北京から杭州まで通じる物流大動脈「中国大運河」を完成させた、第3代の煬帝であった。この煬帝は、611、612、614年と三次にわたり韓国北部から満州南部に版図する「高句麗」を攻撃して、すべて失敗している。この無理な外征によって国は疲弊、彼は暗殺されて隋は滅ぶ(618)。ついで興った唐も、中国統一を果たした(628)後に、高句麗を攻撃したが(太宗の第一次・644年)、果たしていない。これは、高句麗が中国に冊封された王を誅するなど中華の皇帝の権威を損なう行動をとったからである。一方韓国内では、百済と新羅は互いに隣接して互いに攻撃を繰り返して来た。そして百済の攻撃を受けて、新羅は唐に援軍を頼み、連合して百済を攻撃することとなる。百済は倭国(日本)に援軍をいらいする。これにより「白村江の戦い」の舞台ができあがる。

## 2.2 倭国(日本)の百済救援

1) 齊明女帝、西へ・・・以下は、「日本書紀 巻26」より。( )内は追記。

・齊明六(660)年12月———齊明天皇は難波の宮に出かけた。天皇は百済の鬼室福信の要請に従い、みずから筑紫に赴いて救援軍を派遣しようと考え、まず難波において種々の武器を準備した。

・この年——百済のために新羅を討とうと企て、駿河の国に命じて船をつくらせた。

・齊明七(661)年正月6日———齊明天皇を乗せた船は西に向かって海路についた。

(九州について朝倉の宮に滞在。同年7月24日、同地で亡くなる。)

2) 天智天皇、

・天智即位前紀(661年)7月、中大兄皇子は長津の宮にうつり、海外の軍政を指揮することになった(即位せずに国政をおこなう(称政という))。

・天智元(661)年5月、大將軍の阿曇連比羅夫らは兵船170艘を率い、「余豊璋」(百済から倭国へ来ていた人質、百済王、)を百済の国におくった。そして中大兄皇子の命を宣し、百済王位を継承させた。———その功績を褒めたたえ冠位と碌をたまわった。

3) 百済軍——(帰国した「余豊璋」が王となり、唐・新羅に立ち向かう。天智天皇がおくった目付け役の二將軍と連携がうまく行かない。)

## 2.3 戦闘、663年。日本書紀

1) 3月 (前・中・後の三將軍)をつかわして、27,000の兵を率いて、新羅を討たせた。

2) 6月 (百済の「余豊璋」が、反逆の罪で重臣・「鬼室福信」を斬殺。団結が悪い。)

3) 8月17日 唐軍の諸將は170艘をひきいて白村江に布陣を完了した。

4) 8月27日 日本の水軍の、最初に到着したものと、唐水軍が戦った。日本水軍に利が

なく退却した。唐水軍は陣形を強固にした。

- 5) 8月28日 日本の諸将と百済王・余豊璋とは、気象を見ることなく、「われらが先を争うようにして攻めかかれば、敵はおのずから退却するにちがいない」と語り合った。そして、戦列の乱れた中軍の兵士を率いて、陣形を一層堅固にした唐水軍に挑みかかった。唐軍は日本水軍を左右より挟みこむようにして戦った。短時間のうちに日本水軍は破られてしまった。水に落ちて溺死する者が多かった。日本水軍は退却しようにも艦舳カブネを旋回することもできなかった。———豊璋は数人の従者と船に乗り、高句麗に逃げ去った。(以上、日本書紀巻26から)

## 2.4 海戦の纏め

- 1) 軍船——日本書紀では、日本水軍の規模ははっきりせず、中国側の資料などからすると、1,000隻少なくとも800隻と考えられる。倭国の方が絶対優勢だったはずである。軍船のサイズについての資料は乏しいが、スライド9,10に示す(「**2001年6月27日(水)第58回 白村江・古代最大の対外戦争**」NHKのTV放映)CGは、熊本県立装飾古墳館所蔵(熊本県鹿本郡鹿央町)によるというが、唐の軍船の船のサイズが日本に比して非常に大きく正しくない、と思う。
- 2) 戦闘——倭国水軍は気象を十分に調べずに、ただ突撃して挟撃された。時期的に台風シーズンであるがその記述は無い。韓国の資料は潮の転流、風の変化をあげているが、どうか。遠山氏によれば、日本書紀には、この「気象」に「あるかたち」という訓がつけられていることから、「気象を見ず」とは倭国水軍の指揮官らの意思の分裂・不統一をまったく無視して」と解している。いずれにしても、優勢な戦力に油断して十分な意思統一と状況判断することなく突撃して敗れたと読み解いている。であれば、約1,300年後のミッドウェイ海戦における帝国海軍の慢心と油断による決定的敗戦を彷彿とさせる。

## 3. 白村江の問題点

- 3.1 軍船の建造——倭国は、この戦いのために1,000隻の軍船と2.7万人の軍勢を派遣したことになる。果たしてこの時代の日本において、1,000隻もの軍船が660年から1-2年の間に建造可能であったか。日本書記、斉明六(660)年の条に「駿河の国に船づくりを命じた」とある。現在、静岡市埋蔵文化財センターには樹齢350年の楠によるL≒5mの11世紀時代の丸木船が発掘展示されているし、古代に、同市清水港に注ぐ巴川のほとりには、船づくりの集団がいたといわれる。然し、現在静岡県在住で古代船専門家近藤雄一郎氏は工人、材料などから「その規模の建造は到底無理」といっている。別の地方の水軍豪族に分散して建造するとか、現地調達する(M先生)とかも考えられるし、興味をそそる多くの史実と論考があるが、現時点では決め手を欠き不明な点が多い。
- 3.2 百済への救援軍、派遣の必然性  
当時の倭国の人口は約5百万人。この時代に総勢2.7万人、1千隻の軍船を海を渡り

百済まで派遣するような国を挙げての作戦が、何故必要であったか。

- 1). 日本書紀には、(この白村江の戦い(663年)の約60年後の720年に天武天皇の命により編纂された国の歴史年紀とも言えるものであるが、)これについて、単に百済の遺臣の要請にたいして、斉明天皇が派遣を決定したと記されるにすぎない。一方、
- 2). 中国資料は、倭国軍は単に「余豊璋」王に従う輩」とみなし、韓国資料(韓国 KBS 製作 TV)はこれらと大きく異なり、倭国からの救援軍は、百済から倭国への渡来人による祖国救援軍とみなしている。
- 3). 祖国解放の義勇軍——その論旨は、
  - ①倭国朝廷の百済系説——そもそも継体天皇(第26代、507-531年)は百済の武寧王(第25代 462-523年)の弟であり、それ以後、斉明天皇にいたる倭国朝廷は百済系である事。証拠として、和歌山県隅田八幡神社所蔵の国宝「人物画像鏡」の銘文には、武寧王と継体天皇の兄弟関係がしめされている(異説あり)などを挙げている。したがって、斉明天皇は宗家国家?救援の大儀に応えたという事である。
  - ②渡来人——当時九州・四国・中国を含め多数の渡来人が製鉄などの重要な先進産業に携わっており、2.7万人の派遣軍の実態は彼らの祖国救援、祖国解放の義勇軍であって、それを裏付ける証拠もあげている。いずれにせよ、それぞれに異論もあり、真実は今後の研究を待たねばならない深い問題である。
- 3.3. 敗戦史観(定説)——倭国は敗戦による、韓国における倭国権益の喪失と唐・新羅の侵攻の危機を、わが国の国家的危機と捕らえ、九州、瀬戸内、畿内の防衛施設としての水城、山城の築造が急がれたし、さらに倭国の法制の整備も進められた、とされる。白村江の敗戦により、倭国はその危機感と国家のアイデンティティに目覚め、唐の冊封体制の外で奇跡的に「日本」として生まれ変わった、というのがほぼ定説となっている。
- 3.4 異論——上記の倭国の敗戦後の対応は認めつつも、東アジアの環境は簡単な図式ではなかったとするもので、倭国は先進の唐の制度を学び国づくりに移っていったとする考え方である。理由としてあげるのは、
  - 1). 高句麗の滅亡と新羅による韓国の統一、——唐は白村江の戦勝により反転、新羅と共に高句麗を攻撃(666年)。2度の攻撃でついに高句麗は滅亡(668年)。余豊璋は捕らえられ斬首されて百済の王統は消滅した。新羅によって、韓国半島は統一された(675年)。
  - 2). 戦後の倭国——戦後、唐が高句麗を攻撃するときに倭国は協力を要請されている。新羅からもそのほかに協力を要請されている。戦後唐から使節が来訪し、3ヶ月も滞在している。

これらは緊迫した戦後処理とは異質のものと理解される。彼らは、以外に倭国のプレゼンスを高く評価している。一方、倭国では戦後わずか9年にして、わが国最大の王位継承をめぐる内乱である壬申の乱(672年)が起こっている。国家的危機感の中では起こり得ないと考えられる(遠山説)。



# 回覧

—————「白村江の戦い」は海と船の問題と共に、更に大きな歴史を考えさせるま  
さに大海戦といえよう。(終わり)